

# コケコケカムイ

北海道爬虫両棲類研究会 会誌 Vol. 2



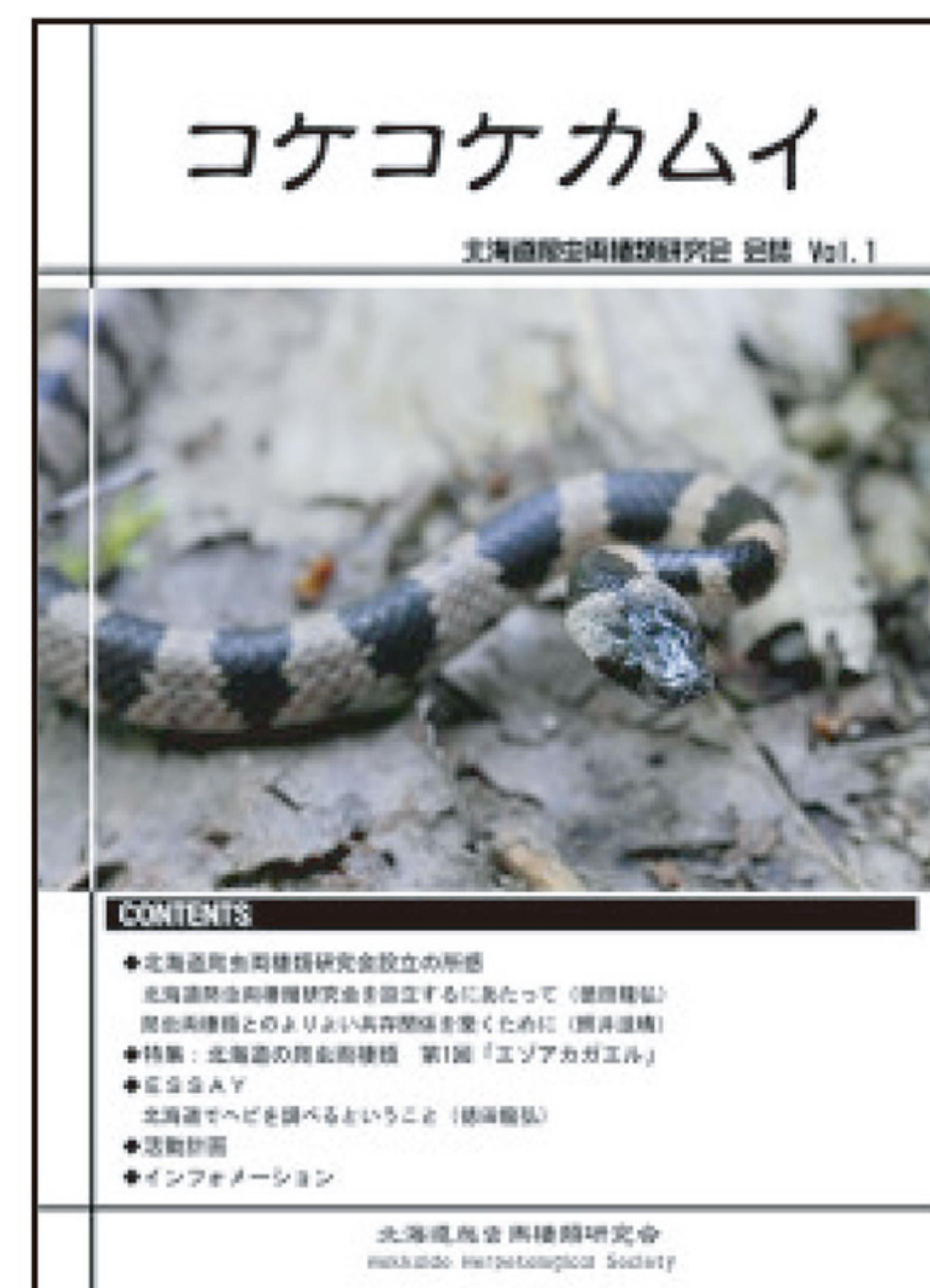
## CONTENTS

- ◆ 北海道爬虫両棲類研究会を発足して
- ◆ 福島県滞在記～爬虫両棲類を探して～
- ◆ 特集：北海道の爬虫両棲類 第2回「アオダイショウ」
- ◆ ESSAY  
釧路湿原キタサンショウウオ探訪記（藤田宏之：埼玉県立川の博物館）
- ◆ 活動状況（2013年度）
- ◆ インフォメーション

# 北海道爬虫両棲類研究会を発足して

2012年2月に会を開設し、4月からスタートして1年半が過ぎました。組織的なものを作ったり、「頭」として動くのも初めてに近い経験だったので、いろいろわからないままに、とにかく突っ走った1年半でした。運良く、初年度から北海道新聞の野生生物基金の助成も受けることが出来たので、ハープソンも「道民参加型両生類爬虫類一斉調査事業」として報告書作成までやり切ることが出来ました。また、皆さまの寄稿、発表を受けて第1回北海道爬虫両棲類研究大会を開催し、研究報告も発刊することが出来ました。とにかく、考えることが多く、また自身の前例のないことばかりだったので大変ではありましたが1年間が無事に終わりとてもホッとしています。今年度からは前年度の経験を生かして活動し、息の長い会にして行きたいと思います。ハープソンや発行物はお楽しみ頂ける内容だったでしょうか？もし気に入ってくれれば、身の回りの興味の有りそうな人に、北海道でこんな取り組みやってるよ、と言い広めもらえると幸いです。両爬の種の多くない北海道ですが、熱く情報発信していく人々の助けになるよう、頑張って行きたいと思います。皆さま、引き続きよろしくお願ひいたします。

北海道爬虫両棲類研究会  
会長 徳田 龍弘



北海道爬虫両棲類研究会が発足してからあっという間に1年半が経過していました。発足のきっかけは徳田会長との何気ない会話からでした。北海道で爬虫両棲類に興味を持ってくれている一般の人たちから研究者たちまでが参加できる研究会を作りたい。でも、会にしても人が集まらないかもしれない。いざ会にするなら決まりを作らなければいけないかな。会としてどんなことができるだろうか。研究などを発表するような大会をやりたい。会誌を作りたい。グッズとかを作るのもいいんじゃないかな。など、ただただ思いついたことをメールしたり、喫茶店で何時間も話したりしていたことが懐かしい。いつの間にやら話は具体的になり、夢のように話していた研究会が現実に走り出しました。会が発足するまでに考えていたことが全て実現できたわけではないけれど、会員の方々の助けもあり、ハープソンや研究大会の実施、研究報告の発行など想像以上のことができました。研究会がこれから5年、10年と続いていけるように、会員のみなさんと楽しく頑張っていければと感じています。これからもよろしくお願ひします。

北海道爬虫両棲類研究会  
副会長 照井 滋晴

# 福島県滞在記～爬虫両棲類を探して～

北海道爬虫両棲類研究会 副会長 照井 滋晴

2013年、筆者である私と北海道爬虫両棲類研究会の会長徳田はひょんなことから福島県で爬虫両棲類の調査旅を実施することとなり、現地まで行ってきました。そこで今回は福島県で出会った爬虫両棲類や現地での体験について綴らせていただこうと思います。北海道爬虫両棲類研究会の会誌なのになぜ?と思う方もいると思いますが、そこは大目に見ていただけると幸いです。

旅は2013年4月と9月の2回。各月とも5日間程度とあまり長い期間の滞在ではなかったのですが、旅に出る前からどんな爬虫両棲類に出会えるのか楽しみで仕方ありませんでした。

4月、旅のスタートは仙台空港。早速レンタカーを借り、福島県南相馬市まで。移動中の海岸線には3.11の津波の爪痕が残され、ひどく驚かされました。TVや新聞などでどれほど報道されても、現地で実際に目にすることでは印象が大きく違いました。



▲いまだ残る震災の瓦礫

福島県に入り、早速爬虫両棲類の調査を開始しました。ただ、4月は季節的には微妙な季節。本州とはいえまだ爬虫両棲類たちはあまり動き出していないかも知れないという不安がありました。しかし、そんな不安を解消してくれたのが「アズマヒキガエル」と「ヤマアカガエル」の卵紐と卵塊でした。成体の姿は見えませんでしたが、そこに両棲類がいるという確信が持てました。皆さんは御存知のことかと思いますが、私は現地で若干混乱してしまったため、ここで一つ確認です。発見することができたアズマヒキガエル（の卵塊）。北海道の感覚でいた私は両棲類が見つかったのにも関わらずあまり気分がよくありませんでした。それは、アズマヒキガエルを「外来種」として見てきたからです。しかし、よく考えてみると福島県では「外来種」ではなく「在来種」でした。それから数日、日中から夜間まで調査地を回り爬虫両棲類を探し回りました。天候などにも恵まれ、最終的には爬虫類は「シマヘビ」、「ニホンカナヘビ」の2種と両棲類は「アズマヒキガエル」、「ヤマアカガエル」、「ニホンアマガエル」、「シュレーゲルアオガエル」、「ツチガエル」、「ウシガエル」、「アカハライモリ」の7種を確認することができました。両棲類については北海道の種数の少なさを痛感させられました。初めて野生の個体を見る種もあり感動でした。



※写真左から、シマヘビ、ヤマアカガエル、シュレーゲルアオガエル、ツチガエル、アカハライモリ

今回の旅では福島県での調査ということもあり、必須アイテムとなったものがありました。それは放射線量計（ガイガーカウンター）です。調査の目的が放射線の関係ということもありましたが、線量を気にしながら調査を行なわなくてはならないことはとてもショックでした。早くそんなものを使用しなくてもよいくらい除染が進むことを願うばかりです。最後になりましたが、震災の被害に遭われた方々には心からお見舞い申し上げます。

今回は4月の旅のみの紹介でしたが、機会があれば9月の調査旅についても紹介させていただければと思います。



## アオダイショウ（青大将）

半年近くにわたる積雪の季節を終えると、爬虫類や両生類の活動期になります。エゾアカガエルやエゾサンショウウオを皮切りに、5月も後半になると、爬虫類を目にする機会も多くなります。今回はアオダイショウについて紹介いたします。

### ◇日本に広く住むアオダイショウ

アオダイショウは日本人に最もよく知られたヘビの1つでしょう。最東では国後島、最北では稚内、そして南限・西限は鹿児島県の屋久島周辺まで生息します。住む環境はいろいろで、森の中から都会の街中にも現れます。これは餌となるネズミや小鳥が住んでいるかどうかに左右され、ドブネズミ・クマネズミやハツカネズミが多く住む都会にもあらわれることがあるんですね。



▲ アオダイショウ

### ◇青くもあり、大きくもあり…

一般的な人の反応から、緑っぽい姿や、体長が大きなヘビを見ると「アオダイショウ」と捉われがちのようですが、その中にはシマヘビやジムグリも多く含まれるように思います。アオダイショウは「青（緑）くて大きい」という先入観があるためです。実際には茶色っぽく青みのないものもいたり、幼蛇のころは斑紋があったりと見た目の色や模様は個体差があります。また体長も35cm～2mと小さいものもいれば大きいものもいます。見慣れるまではヘビの種類を瞬間的に見分けるのはとても難しいのです。



▲ アオダイショウの幼蛇

### ◇力強いアオダイショウ

アオダイショウは獲物を絞めたり、自由に木を登ったりするので、身体がとても筋肉質です。これは他のヘビなどと触り比べるとわかりやすいのですが、力強さでは随一の能力を持ちます。しかし、全ての運動能力が高いというわけではなく、地面を這いまわるスピードはシマヘビには遠く及びません。シマヘビは高速移動に長けた、短距離

走的な運動能力の高さを持ち、アオダイショウは重量挙げや格闘選手のような運動能力の高さを持つのです。

### ◇木の根っこにいる神さま

アイヌの人々にとって、両爬はイメージの良い動物ではなかったようで、伝承にはほとんど良い記録がないようです。特にヘビはマムシのような毒蛇もいたこともあり、非常に怖れられていたようです。オヤウやトッコニといったヘビを指す言

葉はありますが、「言葉にするのも恐ろしい」ので、今の言葉でいえば「あれ」「それ」のような言葉で呼ばれたとも言われます。動物に「～カムイ（～の神）」という名付けがよく行われましたが、ヘビはタンネカムイ（長い神）やキナスッカムイ（木の根にいる神）と呼ばれました。 「木の根っ子のところにいる神さま」だと、なんとなく可愛らしいイメージに思えてきますね。

#### ◇秋の交通安全運動

アオダイショウは春～初夏に交尾をし、7～8月に産卵、9月前後には幼蛇が生まれます。生まれた幼蛇は9月上旬にはよく動きまわり、冬眠に備えているようです。この時期は道路上にもたくさん姿を現します。身体が小さいこともあるし、夕方～夜も動いていることもあるので、この時期とても多くのアオダイショウの幼蛇が運転手に気付かれなまま、車にひかれてしまいます。ヘビは身体が長いので車にひかれやすく、動きも俊敏ではないので、速い車がやってくると逃げ切れないんですね。どの動物相手でもそうですが、車は凶器になり得ます。紅葉の季節、ドライブ中は上方に意識が行きがちですが、時々、思い出してスピードを抑えて、下も見て走ってくださいね。



▲ 青みがなく茶色いアオダイショウ（東京都産）



▲ スピードスターのシマヘビ

・執筆：徳田 龍弘（とくだ たつひろ）  
北海道爬虫両生類研究会会長。

# キタサンショウウオの産卵に出会う

埼玉県立川の博物館 藤田 宏之



私は現在埼玉県内の博物館で、おもに両生類・爬虫類を中心として広く一般の方に自然環境を理解していただくための仕事をしています。特にサンショウウオは世間一般では隠れた存在でありながら大変魅力的な生きものであり、市民権？の獲得のために日々積み重ねているところがあります。

前置きはさておき、昨年仕事で寒冷地の動物をリサーチする機会がありました。そこで、北海道の両生類に目を向けると、エゾアカガエルやエゾサンショウウオのフィールドに行って取材したことはありますが、キタサンショウウオに関しては図鑑など2Dの世界から脱していませんでした。しかも、私のアタマの中は「*Salamandrella*属<sup>※1</sup>だからちょっと違うんだろう」という程度の想像にすぎませんでした。そこで、まだ見ぬキタサンショウウオを、ということで本会の照井滋晴副会長に無理をお願いして、取材の機会を設けていただきました。

2012年4月23日夜、両生類の観察に向かない強風は吹かず、湿気もあり天気はまずまずです。生息地のフィールド周辺は主だった目印もなく殺風景な原野の様相で、土地勘がなければ迷うことしかりです。照井副会長の先導で枯れ草とヤチボウスの間をかき分けると、水たまりがあらわれました。そこには青く光るキタサンショウウオの卵嚢があるではありませんか。ライトを当てると宝石のようなとても美しい輝きを放ちます。しかも1年のうち短い間にしかお目にかかる貴重な卵嚢です。これだけでも現地に足を運んだ価値は十分にあります。



▲ 青く光るキタサンショウウオの卵嚢

さらに、枯れ草につかり尾を振っているオス成体を見つけました。頭の中ではかなり探し回って数個体かなと適当に考えていましたが、あっさり見つかったのでひと安心というか、次の期待が膨らみました。そして何と、産卵を始めようというペアを発見しました。



▲ キタサンショウウオの産卵行動

メスが枯れ草につかり、オスが寄り添っている姿が見られました。いよいよか、という雰囲気で期待が持てます。間もなくすると、メスが逆さにぶら下がっている状態から、卵を産み付けているのを確認しました。やがて、ゆっくりと排出された青白く光り卵がぎゅっと詰まった産みたての卵嚢が現れました。メスがその場を離れると、オスが抱き付き放精を始めました。運のいいことに、産卵の始まりから終わりまで一部始終まで観察できるとは思っていませんでした。

それから、本取材・撮影でキタサンショウウオの生態を多少なりとも学ぶことができたのも大きな収穫でした。エゾサンショウウオなど*Hynobius*属<sup>※1</sup>の止水性サンショウウオとの生き残り戦略の違いや、釧路湿原という特殊な生息環境に適応していることなどです。また、夏でも冷涼で霧の多い釧路地方の気候もキタサンショウウオにとって好都合と考えられ、改めて「現場をおさえる」大切さを感じるところでした。

おまけの話をちょっとしましょう。今回のキタサンショウウオ取材でも見られましたが、エゾアカガエルのオスは鳴きながら前進する行動をとります。別のオスが近づいてくるときによく見られます。他種では本州、四国、九州などに生息するエゾアカガエルと近縁のヤマアカガエルが同様の行動をとります。しかし、ニホンアマガエルなど多くの在来種では留まって鳴く姿しか見たことがありません。また、エゾアカガエルは多くの個体が産卵場所に集中して、「カエルの合戦」を繰り広げることがあります。この産卵行動もヤマアカガエルでは見られますが、ニホンアマガエルでは見られません。鳴いている姿や産卵行動を観察するのは根気が必要ですが、カエルの特徴的な生態をじっくり観察してみてはいかがでしょうか？

今回の取材・撮影にあたり、本会の照井滋晴副会長には大変お世話になりました。改めて感謝申し上げます。なお、釧路市天然記念物であるキタサンショウウオについて、調査許可の上取材・撮影しております。



▲ 鳴きながら前進するエゾアカガエル♂

※1 エゾサンショウウオなど、日本に生息する小型サンショウウオの多くは、*Hynobius*属に分類されています。しかし、キタサンショウウオは別属の*Salamandrella*属に分類されています。

## 活動状況

- ◆ハープソンHokkaido2013の開催  
実施時期：第1期2013年4-5月 第2期2013年6-7月
- ◆ 北海道爬虫両棲類研究会 会誌「コケコケカムイVol. 2」の発行  
実施時期：2013年12月
- ◆ 北海道爬虫両棲類研究会 第2回大会開催  
開催時期：2014年1月25日（土）  
会場：札幌市円山動物園
- ◆ 北海道爬虫両棲類研究会 北海道爬虫両棲類研究報告第2号出版  
発行時期：2014年2月予定（12月末：投稿論文募集締切り）

## INFORMATION

### 【図書】

北海道のサンショウウオたち

著者：佐藤孝則・松井正文

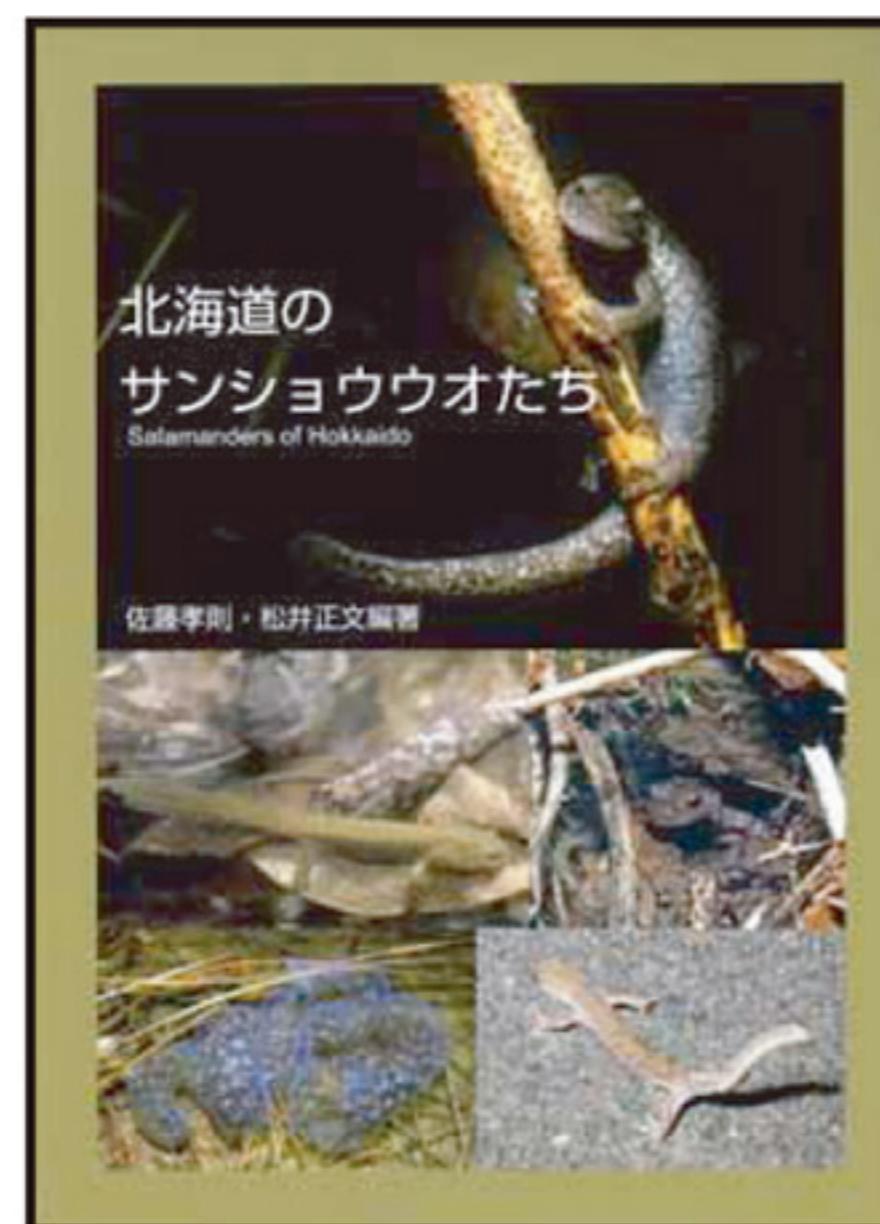
内容：北海道に生息するサンショウウオ2種についての最新情報が余すことなく掲載されています。

ISBN：978-4-907312-01-5

定価：1,500+税

発行日：2013年3月31日

発行：エコ・ネットワーク



### 《表紙写真》

- ・種名：キタサンショウウオ
- ・撮影日：2011年6月
- ・撮影場所：釧路市
- ・撮影者：照井 滋晴
- ・解説：日本国内では釧路湿原域でのみ生息が確認されている小型のサンショウウオ。



▼本号に登場したキタサンショウウオはまだまだ情報が少なく、非常に希少なサンショウウオです。野外で見つけた、見たことがあるという方は、ぜひ当会まで御一報下さい。皆様のご協力をお願い致します。

### 編集者

NPO法人 環境把握推進ネットワーク-PEG  
代表 照井 滋晴  
〒085-0816 釧路市貝塚1丁目10-15 貝塚MS101  
TEL : 0154-65-9184  
E-mail : info-peg@dg7.so-nt.ne.jp

### 編集後記

どんな内容がいいか四苦八苦しながらも、無事にコケコケカムイ第2号を発行することができました。まだまだ不慣れですが、よりよい会誌を発行できるよう精進していきたいと思います。